
神様に愛された子供

田中亮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様に愛された子供

【Nコード】

N3097V

【作者名】

田中亮

【あらすじ】

神様に愛された子供の、旅のお話。

神様に愛された子供

ある所に、一人の子供がおりました。

彼はお父さんお母さんと幸せに暮らしていましたが、ふと世界がどれだけ広いのか、また生きる意味が知りたくなって、二人に内緒で、旅に出ました。

初め子供は元気に旅をしていましたが、しばらく旅をすると、なんだか辛い気持ちになって、道の真ん中にしゃがんでしくしく泣いておりました。

「何を泣いているの？」

道行く人がそれに気がついて、心配そうに声をかけますので、子供は答えて言いました。

「私はやりたいことがあって、旅に出たのですが、お父さん、お母さんに何も言わずに出てきた事を後悔しています。今頃家で私を思って泣いているでしょう。」

私はどうしたらよいでしょうか。」

すると、その道行く人は子供の小さな手を引いて、粗末な小屋に連れて行きました。

「それならこの中でたずねてごらん。」

そこには、光り輝く人がいて、にっこり笑っています。
彼は子供をぎゅっと抱きしめて言います。

「大丈夫。君が本当にやりたいことをするのが、お父さんもお母さんも一番嬉しいんだよ。

それをやり遂げてから、ちゃんと謝れば、絶対に許してくれるよ。」

と、彼は言いました。

子供はそれを聞くと、自分の罪が許された気持ちになって、元氣になつて言いました。

「本当にありがとう。あなたは一体誰ですか。」

すると彼は、

「私は神様だよ。」

と言います。そして続けて、

「私を信じてくれるなら、私はいつもあなたのそばにいて、あなたを愛し、君を導き、君が罪を犯したなら、それを許すよ。」

と言つので、子供は

「それは本当にありがたいことだ。私はあなたを信じます。生きる限り。」

と言いました。

また子供は旅を続けます。

お腹が空いて木の実や若葉、動物を殺してその肉を食べる時、その罪の重さに痛む胸をぎゅっと押さえて、目を閉じます。

そんな時子供には、自分に寄り添う、神様の息づかいが感じられて、なんだか許されたような気持ちになるのです。

やがて子供は岩と砂だらけの荒野に辿り着きました。

昼にはじりじりと照り付ける暑い太陽に焼かれ、夜には息が真っ白になるほど冷え込むその厳しい荒野で、子供はとうとう水も食料も底を尽き、大地に倒れこんでしまいました。

（ごめんなさい、お父さん、お母さん。僕、やりたいこと、出来なかった。知りたいこと、見つけられなかった。）

子供が目を閉じようとしたその時です。

偶然そこを通りかかった人達が子供を助け、彼を自分達の町へと連れて行きました。

そうして子供に水と食べ物を与え、柔らかな寝床でゆっくりと休ませます。

元気になると子供は、自分を助けてくれた人達に聞きました。

「あなた達はどうして、こんな場所で暮らすことが出来るのですか。」

すると彼らは言いました。

「神様が教えてくれたのだ。荒野でみんなで力を合わせて生きる方

法を。」

子供は思います。

（前に信じた神様は、いつも私の罪を許してくれる。今度の神様は生き方を教えてくれる、だって？）

子供は、自分もその神様を信じるから、私にも生きる方法を教えて欲しい、と彼らに頼みましたので、彼らは喜んで子供を仲間に加え、その方法を彼に教えました。

（ああ、神様って凄いや。これで私はもう世界のどこだって生きていける。）

立派な体つきになった子供は思います。

けれど子供はまだ、生きる意味を知りません。
ですから子供は仲間達に別れを告げると、また旅に出ました。

しばらく旅を続けると、一人の人を囲んで、多くの人々がその人の話に耳を傾ける場面に、子供は出くわしました。

「何をしているのですか。」

と子供が聞くと、人々は口々に言います。

「彼はこの世の全ての事を教えてくれる神様なのだよ。」

子供はそれを聞いて、嬉しさで飛び上がりました。

（今度の神様は、私に生きる意味を教えてくれるに違いない。）

そこで子供は人々に混じって、その神様の教えを学びました。

けれど勉強は苦手です。それにその教えはとても難しく、居眠りをしていると、何もかもを知っている神様は子供を揺り起こして言いました。

「悪い事をしないで、善い事だけをし続けなさい。そうしたらあなたはいつか必ず、生きる意味を知ることが出来るよ。」

すると子供は笑顔になって、

「わかりました。信じます！」

と言って、ありがとうとお辞儀をすると、そこを後にし、また旅に出ました。

けれど、今度は行けども行けども、誰にも出会いません。

海を越え、山を越え、谷川に辿り着くと、彼は木陰の石に腰掛けます。

「誰もいない、とても寂しいな。」

けれどその時、足元から声がありました。

「いるよ。」

子供が驚いて立ち上がると、その声は自分が座っていた岩から聞こえてくるのでした。

「あなたが話してるの？」

「うん。僕は岩の神様だよ。」

すると、あちらこちらから声がします。

「私は川の神だ。」

それは流れる川の神が話しているのです。

「僕は君に踏んづけられている土の神様さ。」

子供が足をばたつかせると、耳元をそよ風がくすぐります。

「私はそよ風の神様よ。」

子供はなんだか嬉しく楽しい気持ちになって、踊りだしますと、森や川や山や海、虫や獣や魚や、生きとし生けるもの、この世のものでないものまでも全てのものが、彼と踊り、歌い、笑い合います。

青空が大きな口を開いて子供に言います。

「全てのものはみな神様なんだよ。」

そうして太陽の神様がにっこり笑って言いました。

「あなたが私達を大切にしてくれる限り、私達はあなたを助ける。」

子供は言いました。

「うん、私は、神様達を大切にするよ。」

しばらく行くと都会の町がありました。

子供は巨大なビルや、凄いスピードで走る車、様々な色で点滅する機械をワクワクしながら見て、それらの神々と楽しくおしゃべりをしていると、スーツ姿の男に話しかけられました。

「田舎から来たのかい？ 凄いだろう。この町は何もかも最新の機械で作られ、営まれてる。全部神様じゃなくて、人間が作ったんだぜ。」

子供はその言葉に驚いて言いました。

「神様はどこにだっているよ。機械の中にだって。」

機械の神様はうなずいて、赤や黄色に点滅し、ガーピー音を立てますが、男にはわかりません。男は言います。

「確かにいるのかも知れないね。だけど、それは証明できるかい？俺達は神様に頼むのではなくて、自分達の目で見、耳で聞いて、触れられる、確かなものだけを積み上げて、機械を作った。そしてこの町はこんなに便利になった。」

だから俺は、神様じゃなくて、人間を信じる。」

子供はそれを聞くと無邪気に

「じゃあ私も人間を信じる！」

と言いました。

するとそこへ、罪を許す神様を信じる人が、神様を信じる人のいないその都会に、その神様の教えを広めに来たのに、彼らは偶然出くわして、子供は親しげに挨拶します。

と、今度はまたその逆の道から、生き方を教えてくれる神様を信じる荒野の人が、仲間である子供を心配して、彼に会いに来ましたので、子供は喜んで彼にハグをしました。

すると驚いたことに、今度はその間の南の道から、何でも知っている神様を慕う人が、都会人にもその教えを伝えようと歩いてくるではありませんか。

彼らはその十字路で、子供を囲んで鉢合わせです。

子供は全員が勢ぞろいしたことにとても喜んで、一人一人彼らの紹介をした後に言いました。

「私は罪を許してくれる神様に愛されることで、笑顔で旅が出来たし、

荒野の神様のお陰で生き方を知り、こんなに遠くまで来れた。

何でも教えてくれる神様を信じたから、なんだかとても生きる意味

の答えに近づけているそんな気がする。

石ころにも草木にも空や太陽、機械にだって神様はいて、大切にする限り、彼らは私を助けてくれるし、この都会の町では、人の凄さを教えられた。

みんなの言う事を、そのまま信じて本当に良かった。心からありがとう。」

子供がそう言うと、人々の顔は見る見る真っ赤になり、自然の神々達は大声で騒ぎ始めます。

神々を信じる人々は眼を血走らせて言います。

「お前が信じる神様は誰だ！」

子供はおびえて言います。

「みんなだよ、みんな信じてる。みんな大好きだよ！」

すると彼らは、子供の手足を掴み引つ張り合つて言います。

「私の信じる神様だけが一番素晴らしい。お前は他の神を忘れて、私の神様だけを信じなさい！」

子供は恐ろしくて泣きながら、都会の男に助けを求めます。すると男は、

「神様なんて信じるからだ。お前が神様を信じないって言うなら、助けてやるぜ。お前は、人を信じるんだろ？」

そう言って、彼も子供の手足を引つ張ります。

子供は泣き叫びながら、自然の神々に助けを求めます。
すると自然の神々は騒ぎ立てます。

「お前は神を信じない人間を、信じるといった。どうせお前もその男と同じように、私達が見えなくなるのだろう。」

と言ってただ知らんぷりで騒ぎ立てます。

子供は体もちぎれそうでしたが、何より心がバラバラにちぎれてしまいそうでした。

子供は言いました。

「みんなが私を助けてくれた。素晴らしい神様だから、信じる価値があるからって、あなた達が言うから、だから私は全部信じた。信じて、本当に役に立って心から嬉しかったのに、どうしてこんなに私を痛い目に合わせるの。あなた達は、みんな全員、嘔吐きだ！」

その言葉を聞いて、生きる方法を教えてくれた神様を信じる人が、顔を歪めて泣く子供を悲しんで、手を放します。

すると、次々と全員が手を放しました。

彼らは自分達が間違っていたと、子供にごめんなさいと言いました。自然の神々も、神を信じない人も、口々にごめんなさいと言います。

子供はその場にペタリと座り込んで、みんなを呼んで、彼らを一度にぎゅっと抱きしめました。

そして彼らはみんな、それぞれにぎこちないながらも、互いの神様の素晴らしい部分、人間の力を共有し合い、自然の神々をも敬って暮らすと子供に約束します。

それぞれの信じる神々も、彼らの後ろで、微笑んでいます。

子供は、

「みんな、仲良しが一番！」

と言うと、また歩き始めました。

どこへ行くのかって？

生きる意味を見つけたので、おうちに帰るのですよ。

終わり

2011/07/29 田中円

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3097v/>

神様に愛された子供

2011年10月6日00時18分発行